

レファレンスに基づく活きた蔵書構成

実施日 令和4年度から令和6年度

対象 小学校1～6年、教職員

目的・ねらい

- 学校生活と児童の知的好奇心に寄り添った蔵書構成を目指す。
- 蔵書における需要と供給のバランスを適正化していくこと。
- 学習に必要な蔵書の見直し。

学校図書館活用のポイント

- 児童生徒の学習・学校生活の現状に合った蔵書構成を実現することで主体的・対話的で深い学びにつながる環境を作る。
- 学校図書館の蔵書構成が充実することにより、児童生徒が能動的に探求できる学習環境の実現につながる。
- 授業や休み時間に教職員・児童生徒から寄せられるレファレンスを記録する。
- 記録したレファレンス内容を日本十進分類に応じて仕分けし、データ化する

必要なもの

- 表計算ソフトの入っているパソコン(学校図書館用パソコンを使用)

実践内容	留意点
<p>〈実践〉</p> <ul style="list-style-type: none">● 着任当初から学校司書が児童生徒、教職員からのレファレンスをキーワード、カテゴリー(分類)、学年等の項目で記録する。(毎日)● 学校司書が学期ごとにレファレンス集計を行い、分析結果をグラフで可視化した資料を作成し、図書主任を通じて教職員へフィードバックする。(年度末には年間の集計データを作成・分析したものを回覧、担当教員で資料共有)● レファレンスの多かった分野や蔵書が古い・少ない分野に関して専科教員にも内容を見てもらい選書に協力してもらう。(図書主任経由)● レファレンス集計を分析した結果を選書に反映することで、学習と学校生活に必要な蔵書構成比を実現する。	別紙1参照
<p>〈結果／児童生徒・教職員の反応〉</p> <p>○児童生徒より問い合わせの多かったキーワードの資料やカテゴリーに関するレファレンスが大幅に減少した。</p> <p>【例】5類:料理・お菓子作りのレファレンス件数の推移をみると、令和4年度50件、令和5年度35件、令和6年度1学期の時点3件と、蔵書の充実によりレファレンス件数が減少しているのがわかる。</p> <p>○問い合わせの多かった分類内におけるレファレンス内容がより深いものに移行している。(より詳細な内容、専門的なものへ)</p>	別紙2参照

【例】4類:虫・昆虫→カブトムシ→カブトムシの生態→カブトムシの産卵→具体的な産卵の時期が知りたい。

○少ない分野や抜けている巻、同じような本でも内容の違い(知りたいことがどの程度載っているか、わかりやすく書かれているか)を児童が教えてくれる。

【例】9類:「このあとどうしちやおう」ヨシタケシンスケ(ブロンズ新社)は途中の版からイラストが違うところがある。4類:宇宙の本はたくさんあるが日食とブラックホールについて詳しくわかりやすいものが少ない。

教職員

- 探しやすい、わかりやすくなった。(3年生担任)
- 学級文庫と図書室で児童が読む本のバランスを考えるようになった。(6年生担任)

児童

- 選書が神!(4年生児童)
- 借りたい本が多くて卒業までに読み切れないかもしれない。(6年生児童)
- 昆虫の本は増えたけど育て方について載っている本が少ないので補充してほしい。(3年生児童)
- 韓国語を勉強したいから外国語の棚を増やしてほしい。(4年生児童)
- 山口進(昆虫写真家)の著書がわかりやすかったので増やしてほしい。(5年生児童)
- 調べたいことがあって学校で借りた本をお家の人も読んで同じものを買ってくれる。(2年生児童)